

# 詩(韻文)の形式美と機械翻訳の可能性

河原 俊昭

岐阜女子大学, 文化創造学部 〒501-2592 岐阜県岐阜市太郎丸 80

E-mail: nrj43093@gmail.com

あらまし 詩(韻文)の魅力は内容と形式の美から構成される。翻訳するときに、内容の美しさに関しては、ある程度の翻訳は可能であるが、形式美の翻訳は難しい。英語と日本語それぞれの形式をそのまま対応させるのではなくて、間接的な形で対応させることで翻訳が可能になる。その時に機械翻訳の助力を得ることができる。

キーワード 詩, 翻訳, 韻律, 脚韻, 形式と内容, 機械翻訳

## How to Translate the Beauty of the Form of Poetry (Verse)?

— From the Viewpoint of Machine Translation —

Toshiaki KAWAHARA

Faculty of Cultural Development, Gifu Women's University Taromaru 80, Gifu-shi, Gifu-ken, 501-2592 Japan

E-mail: nrj43093@gamail.com

Keywords Poetry, Translation, Meter, Rhyme, Form and Content

### 1.はじめに

詩の魅力の一つは、日常とは異なる世界を我々に見せてくれるという点にある。そこでは、日常ではあまり使われない語、詩語・雅語が用いられて、独特の文体や形式が好んで使われて、別世界の雰囲気をかもし出す。

詩をはじめとする韻文の翻訳は極めて難しい。実用文ならば、その内容を訳すことができれば、それで目的はほぼ達せられたのである。しかし、韻文は、それだけでは不十分である。語の表面的な意味だけではなくて、背後にある奥義をも含めて訳すのである。形式の翻訳、つまり原文が持つリズムカルな動きをも、翻訳する必要がある。このように、韻文の翻訳は内容(what)と形式(how)の両者において目配りの必要がある。

本稿では、まず、(1) 詩一般について考察する。次に(2) 詩の持つ形式と内面の両面、つまり何を伝えるか(what)と、どのように伝えるか(how)の問題を考察してゆく。そして、(3) 日本語と英語間の翻訳の問題を主として述べてゆくが、必要に応じて他言語にも言及する。そして、最後に(4) 機械翻訳の可能性についても考察する。

なお、本稿では詩という表現を用いることが多いが、芸術的な韻文の代表として詩という表現を使ってゆく。詩と韻文が同じ意味で使われる場合がある。

### 2.詩とは何か

#### 2.1.音声から文字へ

詩は元来は音声であった。原初に、聴覚、嗅覚、熱感覚、視覚、触覚などの全感覚を用いる非日常的な行動があった。例えば、祭りの日に集団が集まって、歌い、打楽器の音にあわせて踊り、たらふく食べて、酒を飲んで、陶酔状態になった。これらの行動から、多くの芸術(踊り、歌、演劇、詩歌)が発生したと考えられる。

詩はこれらの活動の一つが分化してできたのである。全感覚を用いた行為から主として聴覚を楽しむ行為へと特殊化する。それが歌や語りなどの誕生である。聴覚で楽しむために集団で歌うこともあれば、ソロの歌を聴いたり、物語の朗読、詩の朗詠を聴いたりした。

やがて、主体と客体が分離するようになった。全員が斉唱する場合は(例えば、宗教集団が一斉にお経や祈りを唱えるとき)、人は主体として参加している。しかし、人々が専門の語り手の朗読を聞く場合は(琵琶法師の語る平家物語を民衆が熱心に聞いたり、劇の登場人物の台詞を聴くとき)、人は客体として参加している。

様々な活動があったが、それらは次第に洗練されてゆく。その中で、民衆の前で朗読をするという活動から、次第に音声芸術としての詩が誕生してゆく。その後、詩は長らく音声芸術として鑑賞されてきた。しかし、文字の発明により、文字言語としての詩を楽しむことも可能になった。さらには詩は視覚芸術や絵画芸術にもなった。掛け軸に書かれた漢詩の鑑賞ともなると音声芸術よりも、もっぱら視覚芸術と見なす方が妥

当である。

## 2.2. 詩歌と求愛の関係

和歌の起源は、祭や労働の際に集団で歌われた歌謡にある。歌謡の一つに歌垣がある。これは特定の日時に若い男女が集まり、相互に求愛の歌謡を掛け合う呪的信仰に立つ習俗である。これは詩歌の原初的なあり方を示している。若者たちが歌を交わして求愛するという行為は、動物たちが交尾期になると鳴き声を出して求愛する行為と重なるのである。

この求愛という行為は厳密に言語化されて、儀式化されてきた。万葉の相聞歌にその姿が見られる。また、平安時代において貴族は歌を贈ることで、恋心を告白したのである。伊勢物語などは、男女が互いに贈った和歌に物語が加味されて生まれた歌物語である。これは、現在においても歌謡曲やポップスは恋を語る歌が多いことともつながる。つまり、求愛の歌＝詩的言語という図式が成立している。

本稿では、詩の持つ求愛の要素は深く追求はしないが、詩歌の根底にはそのような感情・感覚が存在するという点は抑えておくべきと思う。

## 2.3. 日常と非日常の世界の言語

日常と非日常という視点で分類するならば、詩は非日常の世界に属する。非日常の世界で頻繁に使われる言語は、日常の世界で用いられる言語とは異なる。詩は非日常の世界へと我々を誘うのだ。

ふだん我々は日常の世界に生きている。その日常のちょっとした切れ間に非日常の世界が垣間見られる。この垣間見られた世界を語るのが詩的言語の働きである。前節で述べた求愛の歌が交わされるのは非日常の世界である。

非日常の世界は、不思議な魅力に富んだ世界である。過去の英雄の活躍を語る叙事詩は、聴く人を現代から過去の栄光の世界へと連れて行く。男女の機敏を語る抒情詩は別世界を開示する。それは日常では見えない美の世界を開示する。

詩とは非日常の世界への入り口を示す。そこでは、日常の世界で機能する理性や論理、事実の確実さが崩れ去る。一つ一つの言語は確実さを失い、非理性的となるのである。

日常の世界を翻訳することは比較的しやすい。ここでは、理性と事実が支配しているからである。言葉は確実な意味を備えている。しかし、非日常の世界では、理論は機能しなくなり、言葉は掴みにくくなる。ましては、他言語に訳すのは難しくなる。

## 3. 語彙の翻訳は可能か

### 3.1. 非日常の世界で使われる語彙

詩で使われる語彙はどのような種類であろうか。(1)一つは日常の語彙である。そして(2)別の意味を含有する日常の語彙がある。多くは比喩的に使われるのである。それから、(3)詩語や雅語、古語がある。このような語彙が用いられる詩的世界はどのような世界だろうか。池上(1987:27)は次のように述べている。

言葉は自らの意味する力で一つの「虚の世界」を作り出します。詩の言葉でそのようにして創造された「虚の世界」は、現実の世界よりも「真実」であることが可能です。それを通して、現実の世界から得られる以上の何かが教えられるからです。

詩的な世界はたしかに「虚の世界」であるとも言える。しかし、それゆえにかえって「真実」を伝える力があり、人々の魂にアピールすることができるのだ。

### 3.2. 比喩を翻訳することの困難さ

詩では比喩が頻繁に用いられる。比喩を的確に翻訳することは困難である。比喩はそれぞれの文化や伝統に根ざしているからである。been born with a silver spoon in his mouth は直訳すれば、「銀のスプーンを口にくわえて生まれた」であるが、本当の意味は、「金持ちの家に生まれた」であり、揶揄するニュアンスがある。日本語では適訳は見つからない。あえて言えば、「ボンボン」「箱入り娘」として育てられた、というような訳となる。文化の異なる言語圏の間では翻訳に際して適切な比喩を選ぶことは難しい。

### 3.3. 比喩としての言語

類似性と近似性という概念を考えてみたい。語と語の関係にはシンタグマティック(syntagmatic)な関係とパラグマティック(paradigmatic)な関係がある(アレン玉井 2014: 212)。The horse ran fast. という文では, horse, ran, fast は頻繁に同時に出現するので、次第に相互に連想されるようになる。そして、「速く走る＝馬」というような連結が生まれてくる。語が近接して文(syntax)を作るという点で、シンタグマティックという表現が使われる。詩などでは, Running fast とあれば、比喩的に horse を示すことになる。これらの関係は言語学では近接性と呼ばれ、修辞学では、換喩(メトニミー)と呼ばれている。

パラグマティックな関係も見よう。上記の文は, horse の代わりに dog, cat, monkey と入れ替えることができる。これらの語は語彙表の同一の項目に属しており、その項目から語を入れ替えていると考えられる。

これらの語は paradigmatic に結びついていると定義される。これらの語は、同一の範疇に属するのだ。上記では、動物という大きな概念の中で、個々の動物が対比して存在する。詩でこれらの語が連続して使われるときは、類似の語が重なるのであり、リズムを感じる。さらには、対比法も類似の語を並べることで生じる。パラグマティックな関係は、修辞学上でも対比の技法に使われる。

### 3.4. 共感覚

詩では共感覚がよく利用される。共感覚とは、異なる感覚が重なって感じられることである。たとえば、聴覚を味覚として用いたり、逆に視覚を聴覚に用いることができる。「澄んだ声」「黄色い声」「突き刺す寒さ」のような表現である。

この共感覚だが、比喩の方向は一定の法則がある。人間の感覚を進化の順番にしたがって高等な感覚から原初的な感覚に並べると以下ようになる。

視覚／聴覚 → 嗅覚 → 味覚 → 熱感覚 → 触覚 （池上 1987:89）

原初的な感覚を用いて高等な感覚の比喩表現は可能である。たとえば、「甘い声」、「渋い色」、「熱いまなざし」、「ねちねちした目つき」、などは可能である。しかし、逆の「明るい味」、「うるさい臭い」、「臭い寒さ」などはおかしな印象を与える。なお、視覚と聴覚は同位にあり、相互に比喩表現が可能である。「静かな風景」、「部屋中に広がる太鼓の音」などが、その例である。

これは、日本語に限らずに、普遍的に見られる傾向であり、英語でも sweet smell, hot gossip, clear voice などのように使われる。

この共感覚関係の普遍性は、詩の翻訳の時は、意識すべきである。翻訳しているときには高等な感覚で原初的な感覚を形容するようなことが起こる。翻訳ソフトで用いるときは、形容詞は共感覚に分類番号を与える。視覚(5)、聴覚(5)、嗅覚(4)のように番号を入れておき、多い番号が少ない番号を形容しないように制限を加えることができる。

ただ、比喩の表現は慣用的に定まった面があるので、共感覚の順位に注意を払って訳したとしても不自然な印象を与える場合がある。この点は注意すべきである。

## 4. 近代の英詩の特徴

### 4.1. 近代の詩の形式に関する分類

近代の英詩の特徴について考えてみたい。近代の詩は形式からいくつかに分類できる。それは定型詩と自由詩である。定型詩は、一定の形式に則った詩である。強弱や弱強のリズムが定まっており、脚韻を踏むのだ。一

方の自由詩は、パターンがなく、音韻を踏むこともない。すなわち、自由な形式で書かれた詩である。

### 4.2. リズム、拍の特徴

英詩の定型詩の特徴を幾つか挙げてゆく。英語のリズムは強勢拍リズム(Stress-timed Rhythm)である。強勢のおかれる音節は長く、おかれぬ音節は短くなる。英語では、この強弱と音節の長さの差異で拍を生み出している。それに対して、日本語のリズムは音節拍リズム(Syllable-timed Rhythm)である。

英詩では、弱強の 2 種の音節からなる基本配列パターン(2~4 音節)を詩脚(または韻脚 foot)といい、詩脚が基本単位となって詩行を作る。「弱強」の 2 音節からなる詩脚を弱強格(iamb)と呼び、これを中心とする詩脚が 5 回反復された韻文形式を弱強五歩格(iambic pentameter)と言う。このように、強弱から生じるリズムが英詩の基本となっている。

このような強弱の拍を持つ英語と、高低アクセントで各モーラが同じ長さで発音される日本語とは形式に関しては異質である。日本語の伝統的韻律では、モーラ(拍)が最小単位となり、5 拍・7 拍を基本とする 7 5 調・5 7 調が基本である。英語と日本語ではまったく対応しない。

### 4.3. 英語の脚韻

脚韻の翻訳は可能であろうか。英語は閉音節(子音+母音+子音)であり、日本語は開音節(子音+母音)である。開音節はバリエーションが少ないので、語尾は似てしまうことが多くて、たとえ同じ音であっても、韻を踏んでいるとの感覚は生じにくい。一方の英語では、同じ閉音節になる種類が少ないために、同じ語尾になると似ている(韻を踏んでいる)との感覚を得やすい。そのために、英詩の脚韻を日本語でも忠実に導入しようとした例は少ない。逆に日本語の詩を英語へ翻訳するならば、脚韻を導入して訳詞に形式美を作り出すことは意味あることだ。

なお、西洋の詩でも脚韻を持っていない無韻詩がある。無韻詩とは、弱強五歩格の韻律にもとづき作詞されているが、行末に脚韻語がない詩形である。無韻詩の一番のパターンは、弱強、弱強、弱強、弱強、弱強が 5 つ繰り返されるのである。だが、無韻詩には、この韻律のパターンに従わない例も見られる。

### 4.4. 自由詩

20 世紀以降に、アメリカの多くの詩人達は伝統的な詩形とは異なる形式で詩を書いた。それは自由詩(free verse)である。時代が進むにつれて、人間の複雑な心理を描写する必要が生じてきた。伝統的な韻律や脚韻を

課するという制約は束縛と感じられて、用いるべきでないと感じられたのである。

しかし、自由詩も形式はまったく自由であると考えられるべきではないという主張がある。岡崎(2014:62)は、「free とは、詩が無原則に作詩されているということではない」「自由詩は律格や脚韻が伝統的な詩形のように規則的ではないが、他の詩形と同じように詩作に課せられる種々の制約にもとづき構成されている」と述べている。

自由詩の形式に関する制約は詩人ごとに異なるのであるが、大まかな傾向としては、詩行の右端は、可能な音調句の右端であると述べている。つまり、読み上げるときに、音の区切りの部分が行の右端に来るという傾向を述べている（岡崎 2014:172-3）。

つまり、自由詩の詩人達は意識するしないに関わらず、音調という制約の上で詩を作っているようだ。そうになると英語の自由詩を日本語に訳す場合には、何かの形式上の制約を与える必要が生まれることになる。

## 5.視覚芸術

### 5.1.空白や省略

韻文の持つ形式的な美には、リズムや韻律などの聴覚的な美しさと、文字芸術として視覚的な美しさがある。どこで行を区切るのか、空白はどの程度おくかなどの問題は、聴覚と視覚の両方の美意識と関連する。一方、実用文ではどこで改行があっても意味はさほど変わらない。

また、詩では語をあえて省略するということがありうる。読者の想像に任せて余韻を楽しむのである。しかし、詩の翻訳では、読者の想像が不可能な時があるので、省略された箇所は意味を補う必要がある。なお、実用文では、必要な部分を過不足なく語り、余韻を読者の想像に任せることは稀である。

### 5.2.文字の普及

文字の発明と普及は詩に新しい可能性を示した。詩は読んで鑑賞されるようにもなった。あるいは文字自体が鑑賞されるようにもなった。

詩の視覚的な外見はしばしば詩に意味や深みを付与した。とりわけ、アラビア詩、ヘブライ詩、漢詩、和歌などでは、優美なカリグラフィーで書かれた詩の視覚的表現は多くの詩において、全体に重要な効果を及ぼしていた。アルファベットの文字の場合も、その装飾的効果が多用されていた。書道は、その魅力の多くの点は筆致である。絵画芸術であるとも言えよう。これらの翻訳はほとんど無理である。カリグラフィーとしての詩は内容は翻訳することが可能だが、視覚的な効果までを他の言語に移し替えることはできない。

## 5.3.印刷術

印刷術の発明と普及で、書籍が広く読まれるようになった。詩集の発売がはじまり、個人が所有することが可能になった。それにより詩の性格が変化した。詩とは朗読されるもの、多数の人間と一緒に聴くという性格から、密室で、一人で読まれるものへと変わったのだ。

これにより、個人の内面の吐露のような詩が増えてきた。詩の密室化という現象が生じたのだ。読まれる詩ならば、従来ほど音声へのこだわりは必要がなくなってくる。リズムや韻は昔ほど必要とされない。それは、自由詩の普及へとも繋がってゆく。

## 6.翻訳の実例

### 6.1.西洋語の韻文の脚韻の翻訳

西洋の詩はほとんどが脚韻を持っている。ただし、近年の自由詩には脚韻を持たない詩が多い。ただ、伝統的な韻文には脚韻があり、翻訳でも、脚韻はつけることが当然視されている。グリム童話集の白雪姫のドイツ語の原文を見ていこう。王妃が鏡にむかって自分は世界で一番美しいか質問する場面である。これは韻文となっている。

Spieglein, Spieglein an der Wand,  
Wer ist die Schönste im ganzen Land?  
Frau Königin, Ihr seid die Schönste hier,  
Aber Schneewittchen ist tausendmal schöner als Ihr.

上記のドイツ語原文は下線部が韻が踏んである。それに対応して、英訳でも下線のように韻が踏んである。

Looking-glass upon the wall,  
Who is fairest of us all?  
Queen, you are full fair, 'tis true,  
But Snow-white fairer is than you.  
(出典:『グリム童話集』)

フランス語訳でも脚韻が置かれている。1, 2, 3 行目の行末には脚韻/i/が置かれている。

Miroir, miroir joli,  
Qui est la plus belle au pays?  
Madame la reine, vous êtes la plus belle ici  
Mais Blanche-Neige est encore mille fois plus belle. (出典 *Grimms Märchen*)

西洋語同士は脚韻をつけている。ところで、日本語で

は以下のような訳になっている。

鏡よ、壁の鏡よ、この国で一番美しいのは誰？  
お后さま、あなたはここの誰よりも美しい。だが、  
白雪姫はもっと美しい。  
(出典:『グリム童話集』)

3行と4行は「い」が使われているが、これは日本語特有の形容詞の活用語尾が重なっただけで脚韻が踏んであるという意識は生じない。さらには、訳詞では1行目と2行目、3行目と4行目を一行にしてあり、行を改めて詩的効果を作り出すという工夫はされていない。日本語の訳に関して、「い」は重なったが、これは訳者が意識して重ねたとしても、一般読者には脚韻だとは感じられない。

## 6.2. 俳句の翻訳

ここでは、日本語から英語への訳を見ていこう。例として、俳句を取り上げる。日本語の俳句をどのように英語に翻訳するか、その時の工夫や問題点を見てゆきたい。松尾芭蕉の俳句「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」の訳を見る(池上 1987:33)。

On a journey, ill  
and over fields all withered; dreams  
go wandering still

芭蕉の俳句は5-7-5と拍がある。訳詩では俳句の形式をどのように反映させるか工夫が見られる。訳詩では、1行目、2行目、3行目の音節の数は、5-8-5であり、日本語の拍の数を意識している。さらに、ill, stillと脚韻を踏んでいる(池上 1987:33)。俳句の持つリズム性を何とか英詩に反映させようとの工夫が見られるのである。

5-7-5の拍数と高低アクセントの俳句を英訳するのは、簡単ではない。ただ、英語の持つ、強弱アクセント、脚韻を使用することで、俳句の形式美をある程度は生かすことはできる。しかし、池上(1987:36)が述べているように、この翻訳自体にかなりの無理が見える。形式の異なる言語に強引に訳そうとすると、アクロバットの無理な翻訳になってしまう。

## 7. 詩の機械翻訳の方法

### 7.1. 詩の機械翻訳

詩の魅力は内容と形式という二つの側面から構成される。内容に関してはかなりの部分が翻訳できうる。形式の翻訳可能性に関しては、西洋語同士ならばある程度は可能だが、英語と日本語のように言語構造が異なっている言語に関しては難しい。

機械翻訳で詩の美的価値をどのように翻訳するのか、一つの難問である。ここで、Google 翻訳を用いて英語の有名な詩の翻訳を試みる。そこでは、どの程度詩的な翻訳が可能であるか検討する。有名な英詩 Robert Browning の *Pippa's Song* だが、その形式を見てゆく。

The year's at the spring,  
The day's at the morn;  
Morning's at seven;  
The hillside's dew pearled;  
The lark's on the wing;  
The snail's on the thorn;  
God's in His heaven.  
All's right with the world!

この詩はいろいろな形式上の技巧が凝らしてある。19世紀の詩は朗読という形で鑑賞されることが多かったので、音声上の技巧に詩人たちは敏感だった。この詩では弱強弱という強勢の繰り返しがあって、リズムが生まれている。さらに、この詩は上4行と下4行に分けられるが、1行目—5行目、2行目—6行目、3行目—7行目、4行目—8行目がそれぞれ対になって脚韻を踏んでいる。

形式を視覚的な形式と聴覚的な形式に分けるならば、この詩は、文字の点からも上4行と下4行の各行間の脚韻のつながりは分かりやすい。また、各行の途中にすべてアポストロフィがある。文字の上でも統一感が現れるように工夫がされている。日本語訳では、上田敏の名訳があり、そこでは57調に訳されている。原詩の持つさまざまな形式を、上田は57調を使うことで移し替えたのだ。

この英語の詩を翻訳ソフトで翻訳をして、どの程度の正確さで訳されるか試みてみたい。ただ、そのまますぐに翻訳に掛けるよりも、's は is と書き直し、さらに morn は morning と直す。そのように原文を直した上で Google 翻訳をする。すると、下記のような翻訳が得られた。

今年は春ですが、  
その日は朝です。  
朝は7時です。  
丘陵の露は真っ直ぐになった。  
ヒバリは翼の上にあります。  
カタツムリは棘の上にあります。  
神は彼の天にあります。  
すべては、世界で正しい！

このようにかなり難しい詩でも日本語の意味をほ

とんど拾うということはできている。ただ、どうしても散文調であり、韻文風には当然だが翻訳できない。翻訳者が形式の調整、語彙の再選択を行って、詩らしい響きにする必要がある。

## 7.2.英語の詩と日本語の詩の翻訳

英語の詩の特徴は強弱のリズム、脚韻である。日本の古典詩の形式は 75 調か 57 調が多い。日本語の訳詞に、これらの形式を用いることで、訳詩は原詩の形式美は翻訳できたと考えられる。さらに、日本語の場合も脚韻を採用することも可能である。現代では、あまり意味あることとは考えられていない。しかし、一応は試みることも可能である。

語彙の翻訳には、語彙の適切な選択が内容と形式の両方の視点から役立つ。翻訳ソフトにデータ化した語彙表を含めておく必要がある。翻訳ソフトが意味と音数が適切な訳語を選んで提示することができる。その方法を次に考えてみたい。

## 7.3.語彙の tag 付け

詩で使われる語すべてに tag を付けることは有益な試みである。「古調」「廃語」「上流階級の語」「学術的」「揶揄的」などである。一般の英語の辞書には、そのような tag は付いている。たとえば、『ジーニアス英和辞典』第 5 版にはスピーチレベルを示す語として、「正式」「略式」「俗」「性俗」「文」などが語の定義に付加されている。その他にも地域的差異（方言）、時代的な差異（やや古、古）などの説明が付け加えられる。

詩の翻訳の語彙集はこれよりもさらに精緻な tag 付けを行うべきである。tag 付けされた語彙の選択の一覧表を見て、どの語を採用するかを決定するのは翻訳者である。

## 7.4.脚韻を踏ませることは可能か

日本語で訳詞するときに脚韻を使うのは一般的ではないが、もしも使う場合は、翻訳ソフトの語彙表の助けを借りることができる。脚韻に関しては逆引き辞典を利用することができる。つまり、語彙表に逆引き辞典の内容を読み込んでおく。そして、行末の音と脚韻を踏む音を自動的に選ぶことができる。

たとえば、『逆引き広辞苑』（1992）（岩波書店）をちなみに活用する。「翻訳（ほんやく）」と脚韻が合う語を引くと、条約、膏藥、漢方薬、顔役、脇役、飛躍、夜具などとたくさんでる。これらを翻訳ソフトの中に組み込んでおけば、脚韻を考えたときにはすぐに利用できる。

英語の逆引き辞典のデータも翻訳ソフトには含めることができる。日本語から英語に訳詩するときには、英語詩における脚韻の普及の度合いからも、必要度が

高いデータになる。

## 7.5.音数のデータ

日本語の語彙の音数に関するデータを翻訳ソフトに入れておくことができる。英語から日本語に訳す場合は、このデータを提供できるソフトがあれば、57 音などを意識する翻訳者にとって便利である。

## 8.まとめ(詩の翻訳は可能であろうか)

詩をはじめとする韻文は、長い歴史のなかで、人間の感性に訴える芸術として、我々の生活を豊かにしてきた。そのためにも、詩を他言語に翻訳するには、美しさをどのように損なわずに翻訳するかが重要である。美は内容と形式から構成されるものであるが、内容はある程度は翻訳が可能であるが、形式の美の翻訳は難しい。ほとんど不可能と言えるほどであり、翻訳者はかなりの力量が必要となる。形式の翻訳とは新たな創作であると考えべきである。

翻訳ソフトは創作をすることはできない。形式の美を翻訳することは翻訳ソフトでは不可能である。しかし、人間の翻訳に助力を与えることは可能である。つまり、翻訳ソフトには、語彙の特質、韻律、音数などのデータを翻訳者に提供することができる。翻訳者という生身の人間のために、様々な試訳を提案するという点において、機械翻訳は詩の翻訳の手助けとなる。その手助けにより、翻訳者は訳詩という創作活動がより効果的にできるのだ。

注：本稿は科学研究費基盤研究(c)「高度翻訳知識に基づく高品質言語サービスの研究」（2017 年度 ～ 2019 年度、研究番号 17K02987、研究代表者：佐良木昌）の助成を受けたものである。

## 文 献

- [1] アレン玉井 『小学校英語の教育法』大修館書店(2014)
- [2] 池上嘉彦 (1987) 『ことばの詩学』岩波書店
- [3] 岡崎正男 『英語の構造からみる英詩のすがた』開拓社(2014)
- [4] グリム童話集  
<https://www.grimmstories.com/language.php?grimm=053&l=ja&r=en>(2018/11/10 閲覧)
- [5] リービ英雄 (2004) 『英語でよむ万葉集』岩波新書
- [6] Grimms Märchen(2018/11/10 閲覧)  
<https://www.grimmstories.com/language.php?grimm=053&l=de&r=fr>